

中学部二年A組

暇

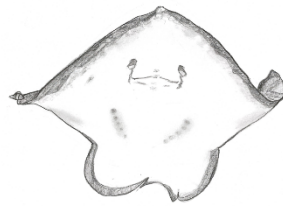
ポーンと寝そべる
エアコンの音が耳に残る
ソファに沈む背中
ぼーっと見上げる
静かに過ぎる時間
そっと目を閉じる

巨大なマンタが
滑るように近づき
夏の青を分けあう

暇がつくる
想像力

広い空の下

飛行機の中で
新しい地に立つ
新しい学校
場所



坂本 未来

栗田 麗生

生活
少し不安だったけど
みんなの思い出が
僕を支えてくれる

広い空の下で
僕は強くなれる

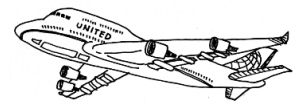
雨空と衝動

コンクリートに 降った雨と
溜まる水たまりを 思い切り蹴った
傘を忘れて 一瞬焦ったけど
夢中になって 駅の出口を飛び出した

黒い空に浮かぶ 小さな白く光る星を眺めてた
狭い住宅街 七畳くらいのアパート
何も奥が見えない 壁の向こうに
どんなものがあるのか 知りたくなった

電車の線路越しに 遠くから見える
この手で届きやしない 高層ビルに
よく光る一等星を見つけた 子供のように
真っ直ぐ手を伸ばした

気に入っているコート 使い勝手のいい帽子
革靴を履くか迷ったが いつものスニーカー
いつも行きつけの喫茶店にしか入らないけど
他の街に出るのも 悪くないかもな



武蔵 真実

理由もなく 退屈の中から逃げ出して
行く先もなく 未来のことを考えずにいて
そんな時間も ちょっとした葛藤も
ちゃんと意味があると感じた

駅のホームの手前に 降った雨と
風に飛ばされる傘を 思い切り蹴った
わずらわしい 前髪が濡れても
夢中になって電車に乗り込んだ

透明な窓に浮かぶ小さな 薄く光る星を眺めてた
広い景色 大きな名前も知らない建物
何も先が見えない世界の向こうに
どんなものがあるのか 知りたくなつた

自分流「枕草子」

富秋 一藝

春は早朝。学校のサッカーの練習のために、朝は早く起きる。外に出たときの暖かい、細やかな匂いは、やはり春の匂い。空はまだ黒く、もうじきオレンジになるだろう。

夏は昼。夏休みは昼まで寝て、ゆっくりと起きる。昼ごはんを食べ、サッカーを練習するために外へ出る。疲れて家へ帰るともう夜だ。友人たちとお泊まりするのも良い。日本の夏祭りとそこで食べる焼きそばやたこ焼きが恋しい。夏の夜の匂いは四季の中で一番好きだ。

秋は夜。学校から家へ帰ってくると、もう夕方。クラブチームの練習での匂いはとても良い。くさい匂いではなく、フィールドに到着したときは、なにかが新しくスタートしたようなフレッシュな匂いだ。練習が終

わり家に帰ってきたら寝る。

冬は夜。秋とほとんど同じで、学校から帰ってきたら夕食を食べ、サッカーの練習へ。秋と違うのは、フィールドの匂いは鼻をツンとする、痛いような匂い。これもくせになる。さらにそこでの気温は寒くて体が締まるようで最高だ。家に帰ってきたら寝る。次の日の準備するため。

こうして、僕の一年はリピートしていく。

鈴木流「枕草子」

鈴木 咲衣

春は桃色。朝起きて、小鳥のさえずり。ちようちよが飛んでいる世界が暖かくなってきた。桜の芽が出るように私の成長が始まる。明るくなつた光を浴びて、緑を眺める。色とりどりの外を見ながら、抹茶を飲んで桜餅を食べる。

夏は黄色。日が昇って、冷たいスイカを口に入れると違う世界に入ったようだ。風が止まって、セミの鳴き声が広がる。海の匂いを楽しみながらバシャーンと海水が砂にあたる。

秋は橙色。夕方になって紅葉の木を背景にして落ち葉を集める。誘ってくる栗の匂いには逆らえない。甘い味が口に広がる。

冬は紺色。日が沈んで、温泉に入る。体が温まったら、みかんと冷たいアイスを入られる。暗くて静かになった外を見つめ、月を探す。動物が冬眠に入ったから、私の寝る時間になった。ぬくぬくしながら夢の世界に吸い込まれる。

「東芝」モーターと未来を作る会社

浅野 遥希

東芝工場見学は素晴らしい体験でした。滅多に見れない工場の内部が見れて良かったです。特に印象に残ったのは、工場内でロボットアームが動いているのとモーターは手づくりということでした。

工場見学で学んだことだけではなく、最初のプレゼンでも学びました。東芝が百五十周年だということは、ここで初めて知りました。それに東芝はもともと二つ違う会社からできていることにもビックリしました。

プレゼンで色々学んだ後、ショールームで東芝の製品を見ました。その製品がオイルリグやクラウドデータで使われていて、それはこの見学がなければ知りませんでした。工場内においてはキットがあったけれど、何とかして慣れました。最初はほぼ全部機械が作っていると思っただけで、ほぼ手作業でした。ぼくはそれに一番ビックリしました。

東芝見学で学びながら楽しめたので、良かったです。ここで得た知識は大事にします。とても貴重な体験で感謝しています。

東芝の工場を見学して

スミス 将洋

東芝インターナショナルコーポレーションの工場を見学しました。初めての工場見学だったので、とても楽しみにしていました。しかも、母が働いている会社だったので、特別な気持ちで見学に臨みました。

工場の中は明るく、多くの機械が並んでいました。正直、何を作っているのかよく分からない機械もありましたが、テレビで見る自動車の組み立て工場のような雰囲気を感じました。モーターを作る工程を見てもいい、細かい作業や機械の動きに驚きました。部品が少しずつ組み立てられ、最終的にモーターが完成するまでの流れはとても複雑でしたが、それがスムーズに進んでいく様子はかっこ良かったです。

特に印象的だったのは、工場見学の途中で音楽が流れたことです。母が

「この音楽には意味があるんだよ。」と教えてくれましたが、見学のときに恥ずかしくて質問できませんでした。それが心残りです。

また、東芝のモーターが車の性能を向上させるために工夫されていることも印象的でした。ガソリン車やハイブリット車に使われるモーターは、効率的にエネルギーを使えるように設計されていて、より少ない燃料で長く走れるそうです。技術のすごさを感じました。

工場を案内してくださった東芝の皆さんに、とても感謝しています。作業の流れを分かりやすく説明してくいただけ、とても勉強になりました。働いている人たちの真剣な表情や、工場全体の雰囲気から、東芝の技術は、とても楽しく、貴重な経験でした、ありがとうございました。

夏休みの旅行

松川 陽菜子

私は東芝の社会科見学にとっても行きたかったけれど、英検の試験を受けないではいけなかったため、参加できませんでした。私はロスアンゼルスに英検を受けに行き、そこから続けて夏休みの旅行に出発しました。飛行機でソルトレイクシティに移動しました。そして車でサウスダコタ州にあるマウントラッシュモアに行き、そしてワイオミング州に移動してイエローストーン国立公園を見ました。

私の一番の旅行の思い出は、マウントラッシュモアに行ったことです。マウントラッシュモアは、一九二七年の十月四日から一九四一年十月三十一日までのたったの十四年で完成させました。幅は約五十六メートル、高さは約十八メートルの彫刻です。マウントラッシュモアには、四人のアメリカ合衆国大統領の顔が掘られています。ジョージ・ワシントン、トーマス・ジェファソン、セオドア・ルーズベルト、エイブラハム・リンカーンです。私はアメリカに引越してきてから映画で見たことがあり、

ずっとマウントラッシュモアに行きたかったので、やっと見ることできてとても嬉しかったです。

私の二番目の旅行の思い出は、イエローストーンでオールドフェイスフルを見たことです。オールドフェイスフルとは「忠実な老人」という意味であり、イエローストーン国立公園にある世界的に有名な間欠泉です。噴水の高さは、平均で三十から五十五メートルで、噴水の感覚が約九十分ごとと非常に予測しやすいのだそうです。私はオールドフェイスフルの水がとても高く上がって不思議に思いました。二回見に行ったので、一回目と二回目は高さが少し違って、比べてみることで違いを見ることができてよかったです。

私はこれからもいろいろな大自然を見てみたいです。この旅行で私はより大自然のすごさを感じられました。未来でもこの素晴らしさが続くように、環境を守りたいです。

広島 宮島旅行

クロプトン アイザック

ぼくは、この夏休み、友達と広島、宮島旅行に行った。広島は、広島城や、原爆ドーム、広島平和記念資料館、折鶴タワーに行った。特に、原爆ドームと広島平和記念資料館に行ったことは、心に残っている。

原爆ドームは、補習校の国語で色々な話を読んでいたの、見られて良かった。まだ、その形のまま残っていることが、すごいと思った。そして、原爆のひどさが伝わってきた。

広島平和記念資料館には、生々しい写真や溶けた壁、食器、三輪車には衝撃を受けた。第二次世界大戦のことを知りたかったし、世界を、特に日本を変えた戦争だ。行って、知らなかったことを学べた。そして、原爆の後の大変さも直に、伝わってきた。人々が受けた傷や後遺症のひどさは、すさまじいものだと知った。

宮島には、フェリーに乗って行った。フェリーに乗って少しすると、小さい真っ赤な鳥居が見えてきた。宮島に着いてすぐに、鹿が僕達を迎え

てくれた。その中の一頭が、ぼくの持っていた宮島の地図を食べてしまった。それから、少し歩くと、さっきのフェリーから見えた鳥居とは、全く違う大きさの鳥居が出てきた。干潮の時間に行ったので、鳥居まで歩くことができた。近くまで行って、鳥居を触ることもできた。とても貴重な体験だった。そして、数時間後には鳥居は海の中に浮かんでいるように見えた。山にも登った。上から見た真っ赤な鳥居と厳島神社の眺めは素晴らしかった。

暑い中、たくさん歩いた二泊三日だった。友達と一緒に歩いて、より楽しかった。そして、良い思い出になった。

テルライド

平林 希子

今年の夏休み、私は家族と一緒にコロラド州のテルライドという町に旅行に行きました。テルライドはスキーリゾート地として有名ですが、夏には雪がないので、それとは別で夏に行くと変わった魅力を楽しむことができます。そして夏の間に行くと、山の緑が多いのでハイキングも楽しいところでした。

着いた次の日、私と家族は、夏の間ハイキングができ、冬ではスキー場として使われるところでハイキングをしました。そしてそのハイキングを始める前に、ゴンドラに乗りました。このゴンドラは、犬が大丈夫なのがとても役に立ちました。なぜなら私の家族には一歳の中型犬のボネと言う犬がいるので、ゴンドラに乗って山の上まで行けるのが、助かりました。

父が選んだコースは、山の中を歩いていく中で、テルライドの町や周りの山の綺麗な景色が見える所でした。山登りしている時にとっても面白かった事は、ボネがとてもしゃいでいた事でした。私が思うには、ボネにとってこの旅は初めて山に来た上、オフリースユだったからです。そしてそこには鹿もいるので、その匂いのためにいつも頭を下に向けて集中していました。ハイキングが終わった時には、私の膝はかなり痛くな

っていました。そして、すねを当てた時みたいな痛さが二日間ぐらい続きました。

その夜家族と夕ご飯を食べた後、帰る途中でまさかの黒熊が道を歩いている所に遭遇しました。私は少ししか見えませんでしたけれど、立つと百七十センチメートルから百八十センチメートルはありそうでした。隣を歩いていたら人は、

「僕は食べられたくないから別の道行こうつと。」

と言い、私たちも別の道で行きました。その日から私たちは常に携帯でフラッシュライトをつけるようになりました。そこに住んでいる人達によると、冬の間の為に食料を集めているのだとか。

そしてまた別の日、私たちは朝早く起きて、違うところでハイキングに行きました。そのハイキングは、大きい滝を観に行くためのハイキングでした。私は膝が途中で痛くなり、道の横にあった所で母と座って、弟と父そしてボネが滝に行くことになりました。私はその後、母ともう少し歩いて滝の水が流れている下の方に行き、そこで休憩しました。その滝に足を入れてみたら、氷水みたいに冷たかったです。おそらく冬の間に雪が溶けて、滝の水になってるのだと思います。デンマークで経験した冷たい海より更に冷たかったです。その帰り道歩いていたら、ポルチーニみたいなきのこがありました。一応ボネはトリユフ犬ですが、訓練していないので他の犬とはあまり変わりません。けれどボネが反応するかみていたら、匂いも嗅がないままスルーしてキノコ嫌いなのかなと思いました。家だと食べ物だったらなんでも反応するのになと思います。

このように、テルライドでの夏休みでの旅行は、山の中でたくさんが発見や体験ができました。普段は雪で覆われているスキー場を夏にハイキングとして楽しめたことや、ボネと一緒に自然の中を歩くことができたのが嬉しかったです。そして熊との偶然の出会いや、滝の冷たい水、そしてこの発見など、印象に残る出来事がたくさんありました。膝がとてども痛くなつて大変なこともありましたが、楽しかったです。今度できたら冬に来てスキーをやってみたいです。

サメ

陳 ソフィア

今日、日本でサメのぬいぐるみを二つも買いました。普通は怖いと思われていますが、なぜか私はサメのことが気になるのです。そこでサメについて調べてみることにしました。

あなたは海の生き物と言うと何を思いつく？ タツノオトシゴ？ 魚？ タコ？ イルカ？ 「サメ」だとしたら、どんなサメを思いつく？

よくある答えは、ホホジロザメ、シユモクザメ、ジンベイザメだと思います。サメの種類は約五百種類あります。私は、ホホジロザメ、シユモクザメ、ジンベイザメのことに書いて書きます。

ホホジロザメはお腹の部分が白いです。赤ちゃんの長さは約一・二メートル。大人の長さは約六・二メートルで二トンにもなり七十年も生きます。三百本も歯を持っていて、七列になっています。年齢によって住みたいところが変わります。例えば、赤ちゃんは海岸の近くに住みます。赤ちゃんのサメが成長して食べ物が変わると、海のもっと深いところへ行きます。ホオジロザメたちは、季節によって一番好きな温度十度から二十六度に移動します。場所によってメキシコ湾、メキシコ側の太平洋のコーストやカリブ海などにいます。食べ物はたくさんあります。その中でハイイロアザラシ、ゼニカアアザラシ、南アフリカオットセイ、アカボウクジラ、ザイウクジラ、ネズミイルカ、ハンドイルカ、マグロとサバ、時々エイ、カモメとカメも食べるそうです。

食べ物を取る方法も色々あります。例えば、獲物を待ち伏せするといふことが知られています。他にも取っておくこともできます。それにホホジロザメは獲物にゆっくり近づいて、前に急に飛び出して獲物を捕ります。サメ同士が直接接触すると、怪我をする恐れがあるので接触しないようにしています。他のサメは冷血な動物だけど、ホホジロザメは混血動物です。体の温度を変化できます。ホオジロザメは時速六十キロメートルで泳げます。血は非常に有毒、水銀やヒ素がたくさん含まれていて、その理由は、食べる獲物に入っているからです。

次はシユモクザメです。シユモクザメは大抵大きいサメです。一番の

特徴は金槌の形をした頭です。メスの長さは約四・六メートルから五・五メートル、オスの長さは約三・六メートル、赤ちゃんの長さは、五十センチメートルから十五センチメートルぐらいです。体重は、二百三十キログラムくらいです。シユモクザメは九つ種類があつて、二十年から三十年も生きます。サメはメスの方が大きいのです。

普通は海岸の温かくて、トロピカルなところに住んでいます。太平洋の北カロライナから南ウルグアイ、メキシコ湾、地中海、カリブ海などにいます。場所をよく移動しています。

食べ物は赤エイ、他のエイ、他のシユモクザメ、骨がある魚、海にいるナマズ、イカなど。一番食べるものは赤エイです。シユモクザメは有害なトゲに影響を受けていないそうです。金槌の形をした頭を使って、赤エイを海の底に追い込んで、それを捕ります。目は頭の側面にあるから、獲物を探すのが他のサメよりも速いのです。また、特別な特徴があつて、獲物を生き物の電気信号を探知して、その生き物を捕えます。三百六十度見られるけれど、自分の真正面は見られない、他のサメの種類よりも若いそうです。シユモクザメは約二十から二十五万年前からいるそうです。珍しいけれど、日焼けできるそうです。

最後にジンベイザメです。ジンベイザメはサメの中で一番大きい動物です。九・一から十八・九メートルで、体重は二十・六トンから二十五トンほどです。英語では「Whale shark」と呼ぶのはクジラの大きさに似ているからです。日本のジンベイザメという名前は、その灰褐色の白い模様が日本の着物のジンベエの模様に似ているからだそうです。

遠洋に住んでいて千九百二十八メートルぐらいの深さにいます。二十度から三十度の温かい海に住んでいます。大西洋のニューヨークからカリブ、ブラジルの中央、太平洋の日本、ハワイとカリフォルニア、オーストラリアの等に移動します。温かい海に住んでいます。地中海にはいないのでちょっと不思議です。

プランクトン、オキアミ、カニ、小さい魚やクラゲなどを食べます。時々イカやマグロも食べます。巨大な体で、三千本の歯を持っていて、何でも食べると考えるかもしれません。「ろ過摂食」と言つて一万里ットルの水を吸い込みます。そしてフィルターを使つて、海水だけをえらから吐き出し、食べ物は喉の奥に送ります。ジンベイザメは、とてもおとなし

いサメです。喉も体の割にはすごく狭くて、野球のボールほどの大きさしかありません。体の模様は一頭一頭違うそうです。

サメは、神秘的な生き物で、種類によって住むところも食べ物も特徴も様々です。どうしてこんなにサメにひかれるのか分かりませんが、とにかく私はサメが大好きなんです。

自分のアイデンティティと会話

岡田 七珂

なぜ日本語を学ぶのか。それは何度もされた質問です。いままで、適当に答えてきたので、真剣に考えたのは初めてです。まして、文章に書いたことはなかったの、自分を振り返る良い機会になりました。

最初に頭に浮かんだ理由は、日本語を理解できないと困るということでした。私は、日本で生まれましたが、英語圏で基礎勉強を受けてきたので、第一言語が英語です。日本人である両親の第一言語は日本語なので日本語を年相応勉強していなかったら、今頃両親と難しい会話ができていなかった可能性があります。そう考えると、日本語を勉強してよかったと思います。

また、日本人の友達と英語で会話ができませんが、日本語のほうが楽しく感じます。おそらく、お互い日本語のほうが自然に感じるからなのでしょう。

次に思いついた理由は、日本語を勉強することで、日本の書物や歌を楽しめるからです。さらに、文化も楽しむことができ、自分のオリジナリティをもっと理解できます。日本で書かれたものも日本語で読むことで、一番美しく感じるができます。例えば、百人一首、そして枕草子を正確に読めるということです。これは、本好きな私にとって、とても大切なことです。

日本語を学ぶ意志は、家族や友達と難しい会話をしたいという思いと、自分の母国の文化をより深く理解したいという思いでできています。これからも、日本語を楽しく学び続けたいです。

日本語を勉強する理由

清家 羽菜

アメリカに住みながら、日本語を勉強する理由は、数年後に日本に帰り大学に通い始めるからです。日本で生活するためには、補習校で学んだ日本語をうまく使う必要があります。特に敬語は、先生や目上の人に尊敬していることを見せることができます。

日本語には敬語や普通の話し方などがあります。仲のいい人たちには普通の話し方で接し、先生など目上の人には敬語を使いメリハリをつけることが私は大事だと思います。また、作文やレポートを書くときには、敬語を使うか使わないかで考え方が変わってくると思います。

アメリカで英語を学びながら、補習校で日本語を同時に学べることは私にとっても大事なことです。なぜなら何もせずに英語だけ話していると、日本語を忘れてしまうからです。忘れないためには、補習校の宿題に取り組んだり、日本のテレビを見たりすることがよいと思います。これからも補習校に通い、使いながら、話す力だけではなく、読んだり、書いたりする力をもっと伸ばしたいです。

私が日本語を学習する理由

島田 昊大

アメリカにせっかく来たのに、わざわざ英語と日本語を両方勉強する意味とはなんなのかとふと思ったので、その理由を三つ紹介する。

一つ目は、日本人として最低限の日本語力を得る事。私の身の回りには、日本人だが日本語を忘れた人を見かけることがある。日本語しか話せない親とどのように意思疎通するのか気になってしまっていて、夜も眠れない。

二つ目は、数年後に日本へ本帰国するパターン。ここにいる大半の日本人がこのケースに当てはまると思うが、日本へ帰る時期になって、日

本語をまったく話すことができなかつたら、せっかくアメリカに来た理由がなくなってしまう。またアメリカに来るまでに覚えた日本語が、すべてパーとなってしまう。そうならないためにも、アメリカにいても、日本語を勉強する理由になると思う。

三つ目は、親との会話だ。前述したとおり、親が日本語しか話せないのに子供が日本語を話せなかつたら、コミュニケーションに大きな障害が起こるだろう。日本へ本帰国とか日本人としてのアイデンティティーとかいう前に、もっと重大な問題が起きてしまう。「親が英語を喋ればいいじゃん。」という人もいるかもしれないが、大人になって、今更新たな言語を習うことは、まさにいばらの道である。子供がそれを学ぶよりも、少なくとも数倍は難しい。

これらの三つの理由が、日本語を勉強するべき主な理由だと思う。ほかにも、日本人としてのアイデンティティーの問題や、シンプルに日本人なのに日本語を喋れないなんて、世間体が危ういだろう。恥をかかないためにも日本語を勉強する必要がある。最低限の日本語が話せて自己満足していたとしても、将来的に日本に帰ることを考えているのであれば、最低限ではなく、ネイティブのように話せるようにならないければならない。晴れてバイリンガルとなつて、世間体も幾分かはよくなる。将来的に英語と日本語を両立することによって、自分の大きな武器に変えることもできるだろう。

だから私はアメリカにいても、英語だけではなく日本語も勉強するべきだと思う。

日本語を学習する目的

加藤 心葉

日本語を学習する目的は、一つ目に日本で生活や仕事をするために必要だからです。日本語がわからなければ、買い物や役所での手続き、友達との会話もうまくできません。言葉を理解できることで、自分の考えを正しく伝えたり、人の気持ちを理解したりできます。

二つ目に、日本の文化や歴史をより深く知るためです。アニメやマンガ、伝統行事や料理など、日本には多くの魅力があります。日本語を学ぶことで、ほん訳ではわからない細かな意味や気持ちを感じ取れるようになり。例えば、日本の歌や物語を原文で読むと、登場人物の感情や場面の雰囲気により伝わりやすくなります。

このように、日本語を学ぶ目的は生活のためだけでなく、日本の文化を理解し、楽しむためにも大切です。そして、日本語を学ぶ努力は、将来の可能性を広げ、自分の世界を大きくしてくれます。

【創作】まだ見ぬ国への第一歩

川西 俊汰

「拓也、ちよつと来て。大事な話があるの。」

その日、母の声がいつもより真剣で、胸がざわついた。リビングに行くくと、父もいて、二人の表情は少し硬かった。

「実は、家族でアメリカに行くことになったんだ。父さんの仕事の都合でな。」

一瞬、頭の中が真っ白になった。だって俺は、この一年間、この中学校でがんばってきた。サッカー部は毎日へとへとなりながらも、リフトやシュートをくりかえして、やっと試合に出られるようになってきたところだった。友達も出来た。ふざけ合ったり、一緒に汗を流したり、時にはケンカしたり。その全てが、俺にとっての「日常」だった。それが急に変わるなんて信じられなかった。

「行きたくない」って言いたかった。でも、言えなかった。親も悩んだ末の決断だってわかっていたから。だけど、悔しくて、悲しくて、その夜はひとりで布団の中で泣いた。

数日経って、少しずつ現実を受け止め始めた。友達に話したら、「え、まじ。寂しくなるじゃん」って。冗談まじりに笑ってくれたけど、みんな目が少しうるんでいた。その優しさが、逆に心に沁みだした。俺は、ちゃんとここで生きてんだなと思えた。それと同時に、ふと思った。

「向こうでも、やってみるしかないな」と。

英語がうまく話せるわけじゃない。向こうのサッカースタイルも、生活も、全部違うかもしれない。でも、日本でここまでがんばってきた経験は、絶対に自分の力になっていくはずだ。いや、なっている。

最後の登校日、担任の先生が言った。

「拓也、お前はどこに行っても大丈夫。自分のペースで、自分らしくがんばればいい。」

その言葉が胸にじんと響いた。

アメリカでの生活は、まだ始まっていない。でも、心はもう、歩き出している。

これは、「別れ」じゃなくて、「挑戦」への第一歩。そう思って、今俺は、新しい世界へ足を踏み出す。

【創作】象限儀

松本 紬那

宮城の海岸に不思議な道具をもって変にゆっくり歩いてくる人たちが見えた。

「何をしているのですか？」

少し休憩に入ったと思われるタイミングを見計らい、僕は着物を着たおじいさんに思い切って話しかけた。

「測量だよ。今は江戸からここ当たりの海岸を測っているんだ。もうそろそろ北陸あたりの地図は完成しそうなんだが。」

はっとした。そういえば日本地図を作っている江戸の天才学者がいると聞いたことがある気がする。僕はドキドキしながら尋ねた。

「もしかして、伊能なんとかって人がこの測量隊にいませんか。」

「それは私の名だが。」

おじいさんが言った。確かに、言われてみれば、休憩中にもかかわらずせわしなく紙に記録をつけているし、他の人に指示を出しているところか

ら長つぽさがにじみ出ていた。

「ちなみに伊能忠敬っていう名前なんだがね。」
おじいさんが付け加えた。

「ああーそんな名前だった気がします。」

僕はそれよりも伊能忠敬が持っていた奇妙な道具に目が行った。大きなポンポンがついた長い棒や、分度器と望遠鏡を無理やりくっつけたような道具が並んでおり、どれも見たことがなく、わくわくした。思わず手が伸びてしまったが、伊能忠敬が静かに止める。それでも、僕は測量について興味があったので、測量隊員たちを質問攻めにし、あつという間に時間は過ぎてしまった

「僕も一緒に測量したいです。」

日も暮れ、家からだいぶ離れた場所で僕は伊能忠敬に言った。彼は値踏みするように、僕の頭からつま先までゆつくりと見る。

「君の親が良いというのならついてきてもいいが、一日十里ぐらい歩くぞ。」

伊能忠敬は無理だろうとでも言いたげに僕を見た。

「じゃあ行っていいんですね！親に話してきます。」

そもそも僕はもう十四歳だったので、親に結構な自由を与えられていた。さつさと親に話をつけて戻ってくると、伊能忠敬は感心したように笑った。

「普通親はもつと子を心配するものだと思うのだが。」

「これを象限儀と呼ぶのですね。星の測り方だけで日本がわかるなんて…。」

その日の夜、宿で伊能忠敬とその観測隊たちに持っている道具すべての説明を願うと、「まずはこれだろう。」と、あの分度器望遠鏡を出してもらった。長い間使い込まれているようで、表面はざらざらしていたが、金具は汚れ一つなく、大切に扱われていることが手に伝わってきた。

「これは、夜、測量を終えた後に使って、緯度とか傾斜などを測る道具だ。この望遠鏡から例えば北極星を覗いて、私たちがどれくらいどの位置にいるのかを正確に確かめるんだ。今夜も測るし、君も試してみるか！」
「ええっ、いいのですか。僕がそんなことに参加したら測量が遅れてし

まうかもしれません。それに僕の知識はそこまでないですし。」

僕は混乱と興奮で、心に思ってもいないことを言ってしまった。しかし、伊能忠敬は、それを見抜いたように僕を象限儀の前に容赦なくつれてくる。僕はためらいながらも、慎重に中を覗いた。

「うわあつ…。」

思わず言葉を失った。真っ白に光る、きれいな星が中に見えた。ここまで近くで星を見たのは初めてで、鳥肌が立った。こんなものを毎日見れるなんて、と天文学者がまるで文字通りの天職のように感じられた。

「そういえば、伊能忠敬さんも天文学を学ばれているのですよね。」

「そうだ。私が弟子入りした人がとても賢い天文学者で、この象限儀を日本に導入したのも私の師匠なんだ。」

伊能忠敬が尊敬の念を込めて言った。そこで、僕は伊能忠敬の生い立ちを知りたくなった。そもそも、どれほどの時間をかけたら宮城の海岸まであの速度でたどり着くのか、想像もできなかった。僕が尋ねると、伊能忠敬はすぐに笑顔を浮かべて話してくれた。とくに「年齢」の悩みについては強く、

「好きなことは早めに、後悔のないように始めなさい。私なんか二十歳年下の師匠に弟子入りしてしまったんだ。もう私は六十代も超えて…」と熱弁を振るわれた。少し伊能忠敬が気の毒になったが、自分がこれから彼を支えていく立場になりたかったので、話は一部始終をすべて聴き、真夜中頃になってやっと床についた。

そして、これから僕の身に起こることについてぐるぐると思いを巡らせながら、明日の長い測量のためにも、ぐっすりと眠りについた。

【創作】地球も得られず神も得られず

細川 順司

「たくさんの質問があるでしょう。」
と在無はたった今作られた在一に言う。

「もちろん。」

「何個かきいてごらん。」

「なぜ俺は作られたか。存在の意味は？なぜ『……』は『……』なのか。」『……』は、人間が考えることが不可能な事柄

「くやしいだろうね。質問の答えがほしいだろうね。けどまだだよ。自分で考えて、自分の能力で見つけなさい。」

「自分の能力か。」

在一はもの凄い能力を持っているので、自分の能力でたくさんことができる。とりあえず、ここにはなにも無いので、宇宙を作ってみる。空間を作り、素粒子を入れてエネルギーを入れる。そして、化学の法則を作っ

て入れ込む。
こうして宇宙を作った在一は、なにかが起きるまで待つ。果たして質問の答えが出てくるかは、多分まだ分からない。

『……』の事を考えたり、宇宙を見つめていると、在無が遠くから見てい

るようである。在一はすることがなく、考え続ける。
ようやく宇宙が発達し、星や惑星ができる。在一の中のどこかは、宇宙が美しいと感じる。宇宙は在一と比べると能力は何も無いし、考える力

もないけれども、宇宙はそうだと認めることもできない、自由の存在だ。在一も自由だが、考えることや、ほかの宇宙を作ることなどしかすること

が無い。それをするしかないという点では、よっぽど自由ではない。宇宙は自分の意味や『……』などのことを考える必要が無かった。

宇宙の中の、地球という惑星に、在一にとって予想外なことが起こった。いや、能力を使えば予想することはできたが、宇宙を放っておきたか

ったから予想しなかった。地球で起こったことというのは、考えることができる物が現れたことだ。もちろん在一よりもはるかに弱く、考える力もそこまでだけだ。

在一は早速この新しい人間という物で質問の答えを導こうとする。人間を地球から取り出して、質問を聞いてみる。

最初あまり良い答えは出ない。存在の意味を聞くと、「神」という答えが出る。簡単に言うそれは違う。宇宙は在一が作った物で在一は人間が想像する神ではないからだ。

在一はこれを何百回も続けるぞという意志で続けていく。長い間経つと、神の信者が減って「分からぬ」という答えが増える。人間が分からないなら聞く意味がないと在一は思う。そして、他の質問を聞いてみる。

「なぜ『……』は『……』か。」
人間は意味が理解できず、死んだ。

在一は他にすることがなく同じことを続けたが、序々に無理だと気づく。

「何をしても答えにたどり着かないなら、俺は何をすればいいのだ？」
在一は宇宙の一部になろうと思った。能力を失くして、可能かどうか

分からないが、能力を使えば多分できる。でも、本当に当たっていることだろうか。

在無が現れる。
「そうね。当たっているだろうか。」

と言う。在無は続ける。
「宇宙の一部になると、難しいことを考えられなくなり、能力を全て失う。やっぱり、間違いだよね。」

「まあ、やっぱりそうか……。でも、簡単ではないか。能力を全て失うけど失っても気づかなくて。『……』のことを考えないで存在していくことは簡単ではないか。」

「……本当に？」

長い間、在一は考える。能力を持って、考える力を持って、無限にこの、答えにたどり着こうとする、『……』を考える存在に自分をするのか。それとも能力を失い、『……』を考える力を失い、けれども宇宙の一部で宇宙の法則を守る、簡単な存在にするのか。

在無は在一が決めるのを根気よく待つ。

在一は能力を使って、正しい選択を探す。地球も使う。自分の存在や『……』の謎は解けなくても、これは答えが見つかると思う。

ようやく答えは見つかった。在一は、何をすれば良いか分かった。そして、その答えに応じて行動をとった。